

Casa

BRUTUS®

よくわかる!!
現代建築の基礎知識。

世界を感動させる、妹島和世×西沢立衛

SANAAのすべて。

サナア

このチーズみたいな巨大建築はなに!?

ヴェネチアビエンナーレ徹底ガイド。
日本一の「栗のお菓子」を探せ!
今年の『東京デザインウィーク』の見どころは?

11

2010 vol.128
NOVEMBER
定価 880円

もし僕がこの世からいなくなっても、この家が生活とともにあり、創造性に満ちた場所であり続けるようにしてほしい。

彫刻家J・B・ブランクは、生前、北カリフォルニアに建てた自宅の行く末を、そのように願っていた。いまJ.B.の家は、レジデンシーという形でアーティストに開放されている。2か月の間、この家に住みながら発表を前提に作品をつくる。彼の意向にどのように応えるかを考えて、家族が始めたプログラムだ。日本ではまったく無名。アメリカにおいてさえ、つい最近までは大型の家具やモニュメントを手がける木工作家として、一部の人のみ知られている存在だったJ.B.を、彫刻家として再認識し評価する気運が高まっている。それは、自然に逆らうことなく静かに暮らし、常に自由に何かをつくることだけを楽しんできたJ.B.の人生と作品が、いま多くのアーティストにインスピレーションを与えているからにはかならない。



J.B.が再注目されるきっかけとなった展覧会カタログ。右は2008年「Reform Gallery」、左は2010年「BLUM & POE」。

A HOUSE Filled with LIFE and



右/レジデンシー中のアーティスト、ジェイ・ネルソン。小型ボードのようなものが、壁が薄く中に制作した作品。まわりにはJ.B.が集めていた材料で、それを使用することは許されていないが、制作を家のどこでやるかはアーティストの自由。左/同じレジデンシー中のレイチェル・グレイは、ジェイのパートナーで彫刻家だ。



J・B・ブランクの家。

サンフランシスコ北西のポイントレイズ国立公園に隣接する
風光明媚な山の中に、彫刻家がひとりで建てた家がある。
あるじ亡き今も、そこにはいつも生きた時間が流れている。

photo_Yoko Takahashi (p.178-p.183), Aya Muto (p.184-p.185)
text_Hitoshi Okamoto coordination_Aya Muto

右ノ家の周囲には石や流木などが並べられて
いる。散歩の途中でJBが拾い集めたものが
無造作に置かれているだけなのかもしれない
が、完璧な作品のように思えてしまう。左ノ
訪れる者を迎える木製の大きなアーチ。

CREATIVITY



A HOUSE Filled with LIFE and CREATIVITY

用の美と純粹な美とが境界なくある場所。

J.B.の家には必要に応じてつくられたものと、
内なる声に導かれてつくられたものが、
同じ価値を持って並んでいました。

1 作品をつくる過程で出た廃材を利用した壁。2 空想家
部屋は子供たちが使っていた。3 自然で使う鉄板もJ.B.
がつくったもの。レジデンシー中のアーティストはそ
れらを自由に使う。4 バスルームにある木製の洗面台、
これもJ.B.がつくった。ちなみにオリジナルのトイレは
和式で（水洗のものが別にある）。肥料として再利用。



家は1957年から建て始め、60年に完成した。2階は8年に改装したもので、J.B.の研究室と書斎がある。作業小屋から運ばれるように物が並べてあるが意図ではない。小屋の後ろには菜園がある。



海

岸で拾い集めた材木や譲り受けた廃材などを使い、彫刻家J・B・ブランクがほぼひとり建てた自宅の総工費は、たったの1000ドルだったという。

敷地内に入るとまず2つのアーチが目飛び込んでくる。もちろんJ.B.の作品だ。昔に覆われたアーチの左側にはワークショップとして使っていた小屋、そしてアーチの向こうに細い橋が架かっている。母屋の2階に直接入れるようになってるのが見える。建物がプロの設計ではないことも、そこここに置かれた石や木片がひとりの人物の審美眼によって集められたものだということも、すぐにわかる。家としての機能は備わっているが、だからといって「用の美」というのではない。例えば貝殻が、種の保存のためにああい形状に進化したとはいえず、必要あつての姿だとは言いがたい。純粹に美しいものであることに似ているかもしれない。家の中に入ると、その思いはますます強くなる。家具もドアノブも洗面シンクも、ダイニングテーブルに重ねられたプレートやウッドポウルも、J.B.がつくった。そこに、彫刻としか呼びようのないオブジェもいくつか混じっている。では、ここにある家具と彫刻との違いは何なのだろうか。だんだんと境界線が曖昧に感じられてくる。

いったいJ.B.とは何者か。ディレクターとしてレジデントとなるアーティストを選び、その世話をするマライア・ニールソンによれば、「J.B.はとても謙虚な人で、

注目を集めるために自分の制作について気取ったセオリーをしゃべるようなタイプではありませんでした。少ない頼まれ仕事で得たコミッションで生活しながら、周囲の自然に感銘を受け、木や石などの素材を観察し、彼の内側からわいてきた衝動や直感に従って、手を動かしてモノをつくることを楽しむ、シンプルでゆっくりとした生き方だったので。事実、76年の生涯において、彼が備展を聞いたのはほんの数度だけだ。にもかかわらず、最近になってJ.B.の作品がにわかには脚光を浴びるようになった。それは若いアーティストを通じて、J.B.の作品の本質や制作に臨む態度などが、だんだんと広まっていったからに相違ない。

レジデンス期間を終えサンフランシスコに戻ったジェイ・ネルソンに感想を聞いた。彼はサーフショップ「MOJUS」のオーナーに深く関わったアーティストだ。「自分にとって大きな転機になったと思う。これから僕の人生をどう生きたいか、究極の例を実際に生きてみた感じ。あの家に住んで制作をしていると、J.B.の作品について、親密なやり方で理解できる。そしてその考え方や態度が、すこく自然に自分の中に取り込まれていくんだ。」

家を博物館のように保存するのではなく、そこに住んで作品をつくるために使わせるといふレジデンスプログラムによって、今後J.B.の意思は新鮮さを保ち、受け入れられていくことだろう。

母屋の内部。正面のカウチは2階に寝室ができる前はベッドだったそうだ。増築の後、ベッドはチェーンソーで2つに切られてカウチに変身。床にチェーンソーでつけた傷跡が残っている。



敬意と信頼に支えられたプログラム。

—見ず知らずの人があの家に住むことに不安はありませんか？

マライア いろんな人に「自分の育った家、亡くなったお父さんの使っていた場所に他人を住ませ、作業させてイヤじゃないの？」と聞かれます。でも、私は安心してアーティストたちにこの家を開いています。この場所をずっとこの場所たらしめるためには、それがいちばんの方法なのだと思う。父もとてもオープンな人で、このレジデンスプログラムが彼の人生の続きであればと前向きにやっています。

—レジデンスには何かルール

があるのでしょうか？

マライア これまでに画家、彫刻家、写真家、陶芸家など、いろんなジャンルで制作している人たちがレジデンスに参加しました。この家の使い方は人それぞれ自由です。自分の家として、料理をしたり、まさに生活する人もいれば、最後まで洋服の入ったスーツケースがひとつ置かれただけ、台所にはカップがひとつ置いてあるだけのままの人もいます。ただどんな場合でも、この環境が、アーティストたちにとってインスピレーションとなり、素晴らしい作品に結実しています。



Mariah Nielson

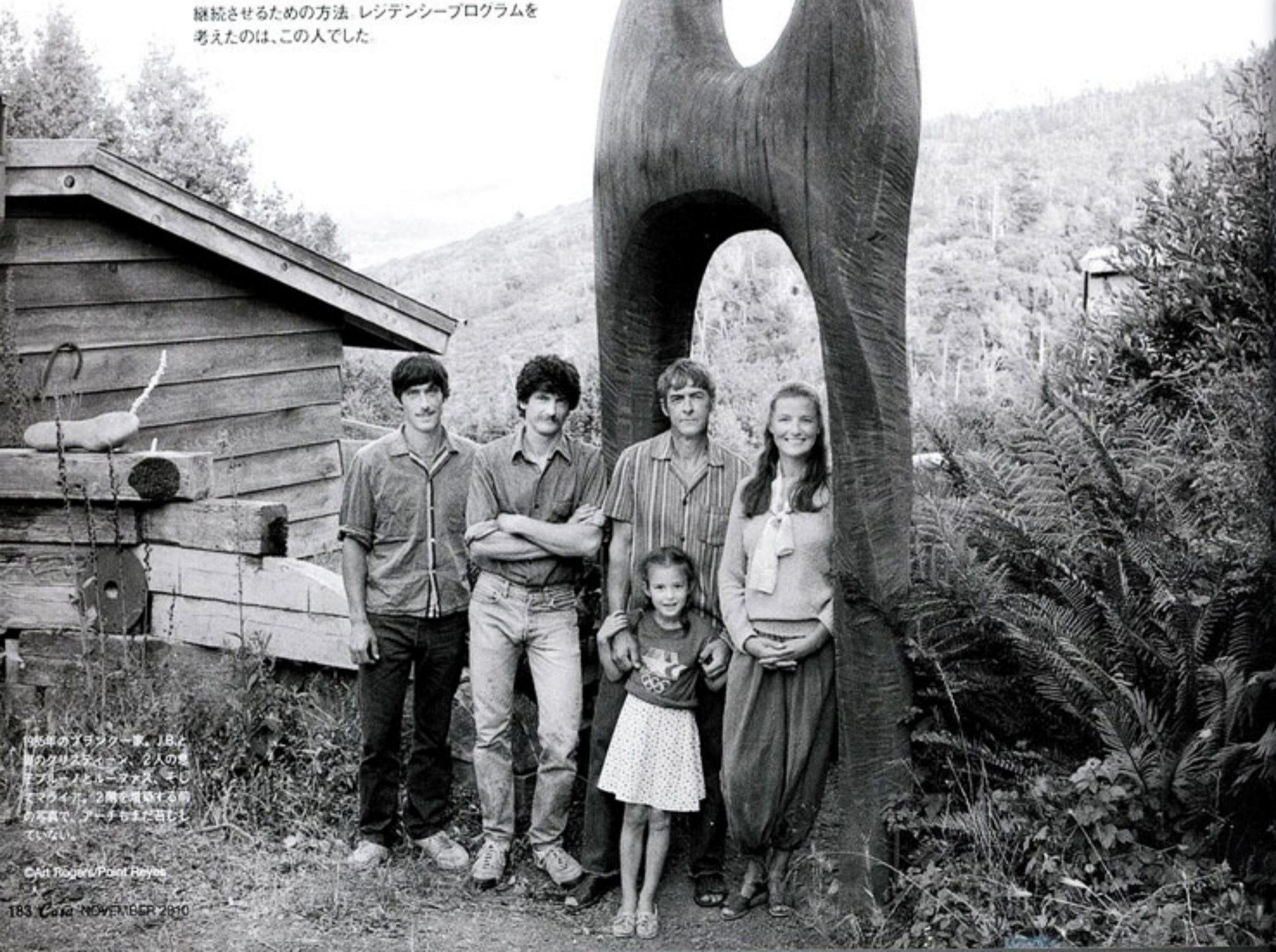
Director of Residency

マライア・ニールソン 住み始めてこの家で生活していた11年の愛蔵、ゴードン・オンスロー・ブロードが設立した「Liquid Art Foundation」傘下にあるこのレジデンスのディレクター。http://pblink.residency.org/

A HOUSE Filled with LIFE and CREATIVITY

父の残した足跡が つないでいく創造の心。

J.B.のやってきたことを最良の形で、生き生きと継続させるための方法。レジデンスプログラムを考えたのは、この人でした。



1985年のブロンク一家、J.B.とクリスティーナ、2人の息子、ブレンダンとローレンス、そしてマライア、2階を借りる前の写真で、アーカイブが古びていない。

©Art Rogers/Point Reyes

A HOUSE Filled with LIFE and CREATIVITY

私たちがJ.B.に惹かれるのは、なぜか。

自然とともに暮らし自由気ままに制作し、他人からの評判を気にすることのなかったJ.B.ブランク。いま、こういう人たちが彼を評価しています。

Gerard O'brien

Gallery Owner

ジェラルド・オブライエン LAにある〈reform gallery〉のオーナーにして、J.B.再評価の立役者のひとり。彼のギャラリーにはカリフォルニアデザインの名作ヴィンテージが並ぶ。<http://reform-modern.com/>



ギャラリーの裏にある仕事場にはJ.B.の作品「witness」が飾られていた（ジェラルドの左後ろに見える木彫作品）。

すべてが別格の芸術家。

—J.B.を知った契機は？

ジェラルド 名前と作品は以前からよく知っていました。ただ、家具ディーラーである僕の前に現れる種類のものではなかった。それが5年ほど前に、あるアートディーラーがJ.B.のつくったスツールを僕のところに持ち込みました。それからほかにも探すようになった。でも簡単には見つかりません。それからしばらくして、ある会合で、偶然にもブルース・ミッチェルという彫刻家に会いました。彼はJ.B.のところでアシスタントをしていたことがあったのです。その縁で、マライアに会うことになり、J.B.の家を訪ねることができ

たのです。

—マライアとはどんな話を？

ジェラルド これまで僕がやってきたことを説明し、彼の作品を扱わせてもらうことにした。そして2007年に「デザイン・マイアミ」というフェアに、J.B.の作品をまとめて出品しました。そこからJ.B.の再発見と再評価が始まったといえるでしょう。売り上げの一部はレジデンシープログラムのために還元しました。

—彼をどのように評価します？
ジェラルド デザイン界を超えてアート界で評価されるべき彫刻家。だから〈ブラム&ポー〉での展覧を企画したのです。



今年3月から〈ブラム&ポー〉で開催された展覧は、会期が途中で延長されるほど好評だった。

